

## 辻邦生のパリ滞在(2)

### Le séjour de Kunio Tsuji à Paris

佐々木 涇\*

SASAKI Thoru

#### 3 現実認識

##### 3-1 違和感を与えるパリ

旅は、ときに不思議な思いをもたらす。旅人の側からアクションを起こさない限り、目の前にいる人々や風景は夢のような非現実感をともなうことがある。とりわけ、それまで体験していなければ、その非現実感は強い。あるいは写真などで予め自分のなかに自分なりのイメージを持っている、それが目前の風景との落差が大きければ大きいほど非現実感は強い。それにその風景にとけこむことができなければ自分が無視されたような状態にもなる。さらにその地に生活していない旅行者であれば、傍観者的な存在となる。フランスに着いたばかりで、その地の様子に明るくない辻邦生はこの状態にあった。

1957年10月9日の日記では暗くなってから到着したパリの様子を書いている。ただ書くのではなく、奇妙に思える印象を書きつけている。

フランスに着いてから、「果していまこれが、眼の前にしているこの野や丘がフランスなのだろうか。本当にそうだろうか」と何度反問しただろう。それは距離のある感じには違いないけれど、何かそれと一つになれないという感じではない。それは、いわば、眼の前にあるものを、何とでも呼べるような、そんな気持なのである。フランスという固有名詞がこの現実にくつつこうとしないのだ。フランスという名前がすがりつつこうとすると、現在の自分が抽象化され、非実在のようになって感じられる。いまいる自分と眼の前の風物をしっかり掴もうとすると、それはもはやフランスなぞという名前が出てくる余地のないものにさえなってしまう。日本からの経験の延長を、もう一度ふりか

えって、確かめなければ、その瞬間の自分とフランスとが一緒にならない。そしてそれは一つになったとしても、頭の中だけで、自分は絶えず分離した二つの感覚を味わっている。この感覚は全く奇妙なものである（そしてこれを書いている今でもぼくから離れてゆかない）。僕は、パリについた瞬間にも、この分離した感覚を持ち続けていた。

（『パリの手記Ⅰ』10月9日、河出書房新社、1973）

翌日、友人のOとともにホテルを探し続けている間中にもこの奇妙な感じは続いた。ようやく捜し当てたホテルでこの日記を書くにしても、そのときの思いを急いで文字にしておきたいとして書き綴る。通りの名を覚え、その通りがどのように走っているかを知るにしたがって、つまり慣れるにしたがってこの非現実感は薄れてきた。

時間感覚と空間感覚とが、僕らをして、僕らが現実と呼ぶある仮象を構成せしめるのだ。僕には、少なくともリュクサンブールにゆき、それから再びサン・ミッシェルを下ってFと会ったその頃には、単に素朴な反射的な空間知覚があったにすぎない。それは殆ど生理的な、直接の環境に対して知覚する感覚でしかない。本来の空間知覚とは、実際には知覚していない間接的な空間に対しても、その名称とか（例えばサン・ミッシェルの次はサン・ジャックだという風に）あるいは経験の再構成とか、とも角、既得の体験、概念を利用して、それをはっきり自分のうちに、感覚しうるものなのだ。それが、僕には全く欠けていた。それは、おかしいほど、奇妙な感覚状態であった。

（10月11日）

慣れとは知覚による認識の積み重ねであり、そして自らのうちでの再構成であり、秩序だてるこ

\* 教授

と、と理解はしていても「奇妙な感覚状態」は抜け去らない。辻邦生はパリに到着したその瞬間から「認識」の原点を実感し始めたのである。

パリに着いて二週間を過ぎた10月24日の日記では、心情があらわに記されている。「不可思議な放心」の日々であり、「一種の怠惰とも無気力とも見なしうる物憂い精神の状態」であった。

Aがついて三日目に、森先生と会って、シャトレの中華料理店でおそくまで話した。おそらく、その時よりも僕がこの空虚さを僕自らに示したのだったのかも知れない。僕は、灰色の曇り空の下に連なるぎっしり詰め合った建物の群を眺め、黄葉する並木を眺め、そして賑やかな人通りを眺め、眺めるということのなかに、やがて自分が消えてしまっているのを感じる。固い舗道の石。休息もなく、溜息もなく、微笑もなく、義務に服する兵士のように無表情なこの石だ。固く、靴の底に伝わってくる冷やかな響き。恐らく単純に、そうした生活環境の変化が僕を疲れさせ、空虚にさせるのかも知れない。そして、建物の高くぎっしりと詰ったこの町の外観が、絶えず、僕を圧迫し、息苦しくさせる。そこには僕らの気を休ませる柔らかな空間は全くない。隅々まで設計され、積み上げ、磨きあげた石の黒ずんだ空間がある。崩れた壁、支えをした建物、狭く入りこんだ横丁……こうしたものから息苦しい、固い抵抗を強いる石造家屋の雰囲気が生れてくる。  
(10月24日)

若き辻邦生が苦しんでいた「詩的な精神と科学的な精神」の対立が最も現われていた状態としてよいだろう。「森先生」とは哲学者森有正のことであり、Aとは佐保子夫人である。辻邦生は先に到着して夫人をパリで迎えたのである。だがパリを知りつくしているわけではなく、むしろ先に触れたように非現実感の状態にあって、自らの位置を確信している状態ではなかった。上の引用文にあるような「生活環境の変化」が原因とする点が、その大部分を占めているのではなく、むしろパリの街の「外観」そのものからである。具体的にはここに記された「石造家屋」で代表される。つまり辻邦生が見ているのは「科学的な精神」によって認識される世界なのだ。日本で知り得た、「詩的な精神」で認識した美しいはずのパリとは異なるし、自らの内部に作り上げたパリとは違う。ただおそろしく物質的な側面をまざまざと辻

邦生の眼前に繰り広げたパリの光景であった。佐保子夫人を迎えて一種の心の落ち着きはあっただろうが、夫人の存在をもってしても埋めつくせない「空虚」さがあることは、「詩的な精神と科学的な精神」の対立のすえに、現実の世界に圧倒された「詩的な精神」の行く場のない、打ちひしがれた状態に他ならない。とすれば、パリ到着以来の「奇妙な感じ」とは「詩的な精神」でとらえるいとまもなく、現実的で、物質そのもののパリが提示され続けられたがためとしてよい。

### 3-2 離日六ヶ月後の変容

こうした思いはパリの街に慣れることでやわらぎはするが、形を変えて辻邦生を時として襲う。1958年1月1日の日記には次のように書かれている。

平穏な不安のない生活の下に、地獄絵のように苦しみもがき不安におびえているもう一つの生活がある。日常の光のなかでは、恒久的であると信じられる調度、家、勲爵、地位、収入、財産に、たえずまもられ、眠らされ、眼をそらされている。しかし、それにもかかわらず、この意識の底にある不安は、われわれを窺い、われわれを放そうとはしない。僕はあけ方に夢をみた。それは、幾つもの枠があって、その枠の中で僕が、この苦悩の主演を演じるような、そんなキリスト教の暦絵のような夢だった。そしてその夢のあと、日常味わったことのない、存在の不安ともいうべき不安を、はっきり感じた。……(略)……

眠り、僕のうちのすべてがとけ、解体したあげく、暗黒の底から立ちあがり徘徊する亡霊は一体何ものであるか。  
(1958年1月1日)

日常的な生活のなかにあっては、人間は眼に見える表面的な生活に必要なあらゆるものを手に入れるために自らの「生」を営む。その基本的な行動は労働に他ならぬが、これによって生活を満たすことになっても精神的な満足感を得る点には容易に到達しない。それを辻邦生は「意識の底」にある「存在の不安」とした。逆に言うならば、不安なき「存在」であれば満たされた意識状態と言うことだ。すると、この満たすもの、「存在」を支えるものを得ることが目下の果たすべきこととなる。この亡霊の姿を見きわめることはできずに、とにかく辻邦生は自らに課した小説論の執筆

を始める。自らの存在感と生の確かさを得るために、「本当に『力』であるもの——これに『言葉』を結びつける必要がある(1月9日)」と位置づけての小説論である。さらには「人の見ないものを見る眼、見ないものまで見る眼(1月20日)」を持ち、現実世界を「創造的な関心の対象として、消化してゆく不断の神技(同)」に奉仕することが「本質的な、生産的な(同)」、「倫理的な美的生活(同)」である、とした。これに向っての小説論の執筆であり、この仕事に邁進した。だが容易に完成したわけではない。

小説論の構成が絶えず動揺しているのは、小説一般の存在理由を考えるという形で、これを考えているからだ。しかし実際には、自分の美学＝倫理的な基礎として、この問題に触れているのである。それを、どこまでも、自分の側の問題として、モノログの展開に押しすすめれば、恐らく、均衡はとれるかもしれない。しかし、モノログとするには、それは少なくとも、客観的な根拠であることを要するのだ(もっとも、それは、科学のテオリーではない以上、客観性を失うまいと務め主観的作業にすぎないかもしれない)、そこで、この小説論の中から《自分》を隠してしまうという一つの意図が生れる。僕は、そのために、それがあたかも、外的な、批評基準が予め存在して、文学史的な眺望を保ちつつ、一つのパースペクティブをとっているという外観をつくらうと意図したのだ。……(略)……一月になって、この外観のために、すこしばかり準備をはじめた。しかし、この前提部と、中核の小説論の展開とが、切れ目を目立たせずに、つなげることは、かなりむづかしい。僕が、この継ぎ目にくると、空気に吸われるように、急速に、頭の中のイデーが空虚になってゆくように感じるのは当然なのだ。この困難はしばらく続くが、それは単に、形式的に解決すべき困難というよりは、むしろ、そこに何か本質的な問題があって、そのための困難かもしれない。(1月25日)

小説が何であるかを文学史的にとらえ、つまり一般的な法則なり、基準を概観する。これは客観的な認識のための作業であり、法則や批評基準を見出し、あるいは定義づけることで、説得力をもつことは当然だ。ここに辻邦生自身の小説論を組みこもうとしたわけだ。小説論の展開に自らの考えを基礎に据えておきながら、普遍性を付加しようとする。しかし行きつまり、「頭の中のイデー

が空虚になってゆく」ような状態になる。とするところの「本質的な問題」とは何か。

佐保子夫人に励まされ、支えられながら取り組む。小説論の完成を執念をもってめざす。

とも角、仕事に専念するほかに、自分の生活はないような気が続いた。それはもはや発表するための仕事ではなく、その中で自分を改築し、問題を徹底して考えを通そうとする仕事であった。たしかにそれは苦渋にみち、難解で、晦冥ですらあるが、そのような形でしか、自分がものを理解できなかったのは、事実なのだ。一日じゅう、原稿用紙に心をすりつけるようにして書いた。何度か挫折の危機を切りぬけ、とも角、前に光らしいものが感じられたのは、三月半ばすぎだ。その後も、相変らず、苦しい重い歩みが続いている。しかし土台となるものだけは、どうやら置くことができた……(略)…… (3月26日)

この「土台となるもの」は日記には記されていない。それから十日ほどのちの4月5日には確實さのともなう思いが記されている。

このところ家に閉じこもりで「小説論」の中心テーマを書いている。町には休日の気分があり、噴水が町角にきらめいて、賑やかだが、それと反対に、テーマの核心の最も深い秘密の部分を探りだそうと、考えに考えぬいて、くたくたになる。それはいわば僕の視点の転換を強いるもっとも困難な、しかし決定的な部分の思考なのだ。……(略)……僕としては個別的なものの巨大な力を見だしたように思う。論理の網にまどわされず、それをつきぬけて、直接に純粋に物を見ることの意味が、はっきりつかめたように思う。ということは、僕はそこへ進みでて、それらをはっきりとらえることに落ち着くことができ、もはや、網目の中を右顧左眄する必要がなくなったことを意味する。あゝこれだったのかと、胸の底にどーんと沈んでくる不変を約束する実感が生れる。(4月5日)

やはり日記では「決定的な部分の思考」と「胸の底にどーんと沈んでくる不変を約束する実感」について具体的に書かれてはいない。ヴェールがかかっているようですっきりしないが、とにかく辻邦生が苦しんだあげくに到達した状態であることは間違いない。このあとスイスのローザンヌへの三日間の小旅行をするにも小説論の原稿をたずさえていた。パリに戻って4月25日の日記では次

のように記す。

(4月28日)

「小説論」(194枚)を第二章までで中断する。最も僕にわからなかった部分を、僕なりに徹底して考え、僕なりの結論が見出された。この後、約200枚に予定される部分は、文学史的知識により、この見出された原理の適用である。僕は、これを書きながら、ずいぶんと苦しんだが、ようやく、文学の中へ出てこられたような気がする。小説が主観のたわいない作業であると思えなかった頃から、何という遠い道のりであろう。しかし、一つの荷をおろすと、何かちょっと物足りぬ悲しい気分だ。もちろん、また荷物を背負わねばならぬが……。

(4月25日)

だが、このことは大きな自信とはなっていない。ときには「救いようのない気持ち(4月28日)」になり、自信どころか「生活全般にわたって、すべての支えが崩れてゆくような(同)」状態になってしまう。ということは、小説論に取り組んでいて、そこでの論理にしたがって思いを展開していればその手ごたえのよさで「文学の中」へ出たのであって、日常生活そのものにあっては何の意味ももたらさないことに気がついた。辻邦生は自身の生活、ひいては生き方の問題に思いを展開する。

人の生活原理がわかるということは、たしかに悪いことではない。しかし自分の生活原理が、それによって、つねに計られ、動揺するとなれば、むしろ生活など透視できない方がましではないか。……(略)……

僕は自分でも留保つきで承認している原理をもって——俗にいえば、妥協して生きている——ということ、決して否定しない。……(略)……僕は、そのような自分らしい窮極的な生活があるわけがないと思いつつ、自分の中に、それを願っており、そうしたい、そうしているという混淆が起っているのだ。そこに僕のある種の動揺の原因がある。……(略)……

自分の精神的な作業を中心として、自分の生活が回転しうるだろうか。自分はずねに動揺し、つねに、自分で自分の理想像をえがき、それで現実を隠そうとしているのか。それはわからない。精神のポリテイクではそれで許されるだろう。しかし、そのようなポリテイクがときに崩れるのが問題なのだ。…(略)…

僕は、文学的な最初の課題は、小説論の中で果したような気がする。しかしこのような生活につきまとう弱さ——それについての十分な追求がなければ、創造という問題までには、まだ道が遠いかも知れない。

確かに小説論を書くなかで、そのよってきたる基盤を見出し理論化できたかもしれぬ。だが実はそれは机の上の作業、つまり知的作業、辻邦生自身の精神内での作業であった。これが日常生活の一部としたとき、「弱さ」があると辻邦生は認めている。自分なりの「原理」で自らの生活を営んでも、つまり「妥協に生きて」いても「人の生活原理」に照らし合えたとき「動揺」してしまう。とすると自分なりの「原理」はあやふやで確かなものではない。「精神的な作業」を支えるものが辻邦生にとって不明なのだ。確かなものが心の内に生れても、未だ現実の重みに耐えうるものとはなっていない。「創造」のためにはこれを捜し当てねばならない。5月1日にもこれに関連する記述がある。

ここしばらく、小説論の休止のあとの、何か生理的な転換の意味で、外に向って生活を開いている——というのは、要するに遊んでいる——のだが、しかし、絶えず、一種の焦燥感にとりつかれ、気持ちが圧迫される。仕事という言葉、行為が、阿片でない以上、僕は、それをしている間、落着いていられるが、急に、仕事の休止とともに不安に転化される点、いくらか仕事の性質に疑問を抱く。僕は、自分の小説が自由に書けないということに焦燥するのではないが、それが、不生産な状態と無関係でないことだけはたしかである。

(5月1日)

自らの生活が生産的でないことに、その端を発しているのだ。もちろん、この場合パリにあって現実的な生活でごく普通の人々と同じに人間社会に組み込まれた状態ではないことを意味している。結果からみればこの苦悩している状態は、小説家になり得たのだから、実は生産的であった。だが当時の状態ではこのような思いに到達したのは無理からぬことであろう。辻邦生のこだわりの部分を示しておきたい。

僕が社会的な存在であることを自分から切りはなせないことはたしかだが、自分の求めるものために、それを最低のところまで切りすて、あとは自分だけの純粹に展開された世界に住んでいなければ、恐らく、かかる美名への焦燥は、絶えず自分におとずれるである

う。 (同)

そして確信をもっていう。

恐らく五月は僕にとって一つの転換期となるだろう。僕は、このような純粋な展開を、力をこめてまもらねばならなくなる。すなわちヨーロッパというこの膨大な空間に対して、より純粋な、全身的な、自分の尺度による、非時間的探求をはじめだろう。僕には、今、小説を書くことより、このような対象に向って身を投げかけ、そこに自分の変貌をみなければならぬ。それは、僕が三十三日の旅で自分を変貌させ、三ヶ月の小説論のなかで変貌させたように。こんどは非時間的、非空間的对象に、博学という形式の精神の旅を行うのだ。自分の主題に、書く形式を当分はしたがること。 (同)

小説を書くにあたって、登場人物を含めて世界をどうとらえるかが問題になっているのだ。「言葉」に力を与え、小説を書く意味の根拠を得るために現実世界の認識の仕方である。

僕の性急な、すべてを知ろうとする態度は、構成的全体と欠如の典型的例であるといえる。それは主観的なものを任意の、意味ない存在と考えるところから生れている。森先生のいうように、どのような客観的なものでも、主観的なものであることをまぬがれない。客観的であろうとして、任意なものを排するのは、正しい。しかしそのために、客観的認識という架空の全体をつくり、そこに達するまでは、すべて無意味で過渡的であると考えるのは、正しくない。窮極の客観的認識といっても、それは万能の力ではないし、そこに達する間ですら、その一つ一つはつねに客観的な認識を含んでいるのである。

「全体」を性急にみたそうとする欲求は、緊張を生むが、個々の「欠如」の要素は、この「全体」をもっと好都合に、直線的にみたそうとする。そこで個々の要素は全体的に現われず、つねに限られた要約的な側面として把握されるほかない。……(略)……

(書くことを)放棄せざるを得なかったのは、書かれた幾百万のものより、事実の力の方が強いと信じたからだ。果して、「事実」の世界の中に入って見て、この誤りを知った。「事実」——僕が客観的なものと考えたもの——は、偶然的なものであり、質量的であっても限定されている。それは、まさしく経験的と呼ぶものだが、平面的であり、素朴であり、その半径はみじかい。ぼくはそののびきならない、絶対的な力を考えていたのだが——橋をつくるには、高度の技

術が必要だという意味の——しかし、それは、有限のものであり、精神の現実性にくらべて、閉ざされた、繰返しの、一面的なものにすぎないのがわかってきた。

(5月4日)

この考えをここに展開するに至って、つまり言葉としてここに書きつけることによって、辻邦生はこれまでの小説を書かんととしては、果し得なかった原因たるを見出し、定着させた。世界全体をとらえなければ書けないという思い、何ごとも体験しなければ書けないという考え方、つまり日本の私小説的な考えを否定することになる。

そして「主観」ということも完全否定するわけにはいかないという思いに至ったのである。

### 3-3 「もの」との親和

模索する辻邦生は実感を通じて、自らの変りようを見つめたいと、このような状態になった。そしてやはり、その思いを日記に書きつけている。ただし、これまでの考えを整理しているとしてよいだろう。だから繰り返しになるが確認の意味で見たい。1958年5月11日の日記である。

小説のもつ「現実似ている」というところが、僕らに異常な困難を与える。一方に現実があり、他方に外観はそれと似た別個のものがある。僕らのうちのさまざまな主題を、このような「物」の形の中にとじこめなくてはならない。かつては「物」との親和があったのだが、僕らには、それはもはや遠い回想を呼ぶものでしかない。「物」の中にとじこめるということと同時に「物」との親和をとり戻さなければならない。……(略)……

「物」に対する「愛情」は、このような「手段の連続」の中からは生れない。それは月世界のような無機質の物質の残骸が、累々と横たわっているのに似ている。冷たく、自分のなかに固く閉ざれている。僕らは、その外形を単に利用するにすぎない。そこには、何の交流もなく、交感もない。僕は、このごろ、ようやくこのような冷やかな物質の外形の不気味さに気づきはじめた。僕がかかる「物」へ最終的に屈服して以来、この物質の外形の単なる「置きかえ作業」は、僕に、もっとも本質的な、客観的な仕事と映った。おそらくそこから僕の精神的な不毛状態が生れてきたにちがいない。

(『パリの手記Ⅱ』1958年5月11日)

「他方に外観はそれと似た別個のもの」とは、小説や物語の世界、もしくはフィクションの世界だ。この世界がとにかく無力だと、かつて辻邦生は思い知った。つまり現実には「底知れぬ力」を持っており、この「物云わぬ物質の世界」にわれわれ人間はただ圧倒されるのみだ。「思考も言葉も、ただむなしい響き」でしかない。そして決定的なことは学問だった。

この虚しい多言、虚しい非行動に対して僕をさらに圧迫したのは、学問というもの、知識というものの客観的（とでも名づけるべき）姿であった。僕がこの精神の昂揚、非現実的な冒険からの集積が立ちふさがっていた。しかもそれを自由に駆使できるのは、あたかもメスをふるう医者のように、僕には、より現実的であり、より有益なものに思われた。僕が有効性という概念について考えたのもその頃だった。人間が現実に対して、いかに有効な能力をもっているか、によって、その正しさを判断しようというのであった。僕はその頃認識についても同じく客観的であることを要求した。いかに誠実だと云っても、客観的な認識がなければ無意味だと考えたのだ。……(略)……物を変更すること——それが僕の根拠となった。僕は現実に従った。語学の勉強にもつとめた。とも角忍耐して、「現実」に参加しようとした。それは「現実」をかすめて、ふわふわ生活している自称芸術家・文学者への嫌悪となって現われた。僕は科学者、建築家、労働者を愛した。僕がもっともマルクス・エンゲルスの世界に近づいたのはこの頃であり、とくにレーニンの『唯物論と経験批判論』は僕の精神をゆりおこした。すべての観念に先行する物質——不可知論を相対的認識論として克服し、より高い弁証法的思考へ進んでゆく逞しい思想と弁証は、今でも僕のこころをつかんでほさない。(同)

科学的なものの見方、とらえ方に正しさがあるが故に従わなければならない。「しかし」と辻邦生はこだわる。

しかし、問題は、「現実」に従うということにあった。現実を無限に置きかえ、変更してみたところで、それは永遠に物質の圏内に閉じこめられている。僕は根拠のないひとりよがりの精神を否認して、物質に服従したが、それはこのような無限に連続する置きかえ運動の世界に入ることにすぎなかった。……(略)……知識もまたこのような現実の中に立つ要

素の一つでしかなくなる。それは客観的であることを要求される。というのは、それが現実に対して有効であるかどうかを要求されることであった。知識は技術になり、現実処理の手段の一つとなった。このような無限の物質的現実という平面に吸いこまれると、僕らは、何のためにそれを行っているかという根源的反省に帰ってくるのがなくなる。(同)

「現実に従う」とは、いうなれば、自然の法則に従って生きることだ。確かにわれわれの肉体は自然の法則に従って生長し、生殖を営んで人間という種を絶やさずに子孫を残してゆく。だが他の動物たちと同じようなことをするだけで人間の役割としてよいのか。主体的に生きようとする一人一人の人間をこのような形でくくってよいのか。人間は精神をもつ以上これに飽きたらずにはいられないはずだ。自然の法則に従っている限りの状態にあり、単に「もの」の属性に従うのみの状態を辻邦生は「閉ざされた世界」とする。ところが人間の精神は、それぞれの思い、意志を伴うがゆえにより自由を、開かれた世界を希求する。それにしても手をのばし、認識できる世界は余りに狭い。

しかし僕にとって、確からしさというものが、どれほど重要なことだったか、想像を絶している。ただそのようなものにだけ安心して落着くことができ、僕自身もそのようなものだけを読み、書き、考えた。僕はこれを「主観的」なものは恣意的で信じがたく、「客観的」なものだけが根拠あるものという風に表現していた。精神は、ここでは締め込まれ、「客観物」が確からしいというそれだけの理由で、わずかに存在をゆるされるにすぎなかった。(同)

だから若き辻邦生にとって「主観を脱して客観につくということ」が念願であり、「それ」以外は無意味であった。「それ」を「実践の世界」と呼んで説明する。

実践の世界は、沈黙した、形体の変化の世界である。しかし人間が、その世界の中におかれているということ自体で、世界の様相がかわりうる。すなわち形体の変化は非人称的に、それ自体で行われているのではなく、人間に従っていないければならず、人間の意味が絶えず問題となってくる。(同)

人間の意のままにならない世界は、確かに現実の世界である。それを自然の法則にのっとった世界とすれば、「実践の世界」とは、より粹のせばまった人間の営む世界ということになる。社会とすればわかりやすいだろう。だから人間社会には「形体の変化」があり、「世界の様相」が変るのであって、主人公である「人間の意味」が重要となる。

僕が日本を出る前から徐々に見出しはじめたこの方向は、精神と物質の遍歴のすえに邂逅した、それらを共にした一つの領域なのだ。それはもはや非人称的な物の変更世界でもなく、さりとて自らのなかにとどまる精神の世界でもない。それはどちらか一方だけでは片手落ちであり、頽廃するほかない。(同)

このような思いに達したのは、第二次世界大戦が、そして価値観の様変わりした日本の状態が辻邦生に影を落としたから、と言えまいか。

さて、このように探し得るべき世界の様子を消去法的に記したのち、ドゥイノのエレジーの詩の二行を引用しながら「物質の中に浸透した精神というのか精神に目覚められた物質というのか」と形容し「透明なきらめきのようなよるこびの生れうる世界でなければならない」と描き出して、さらに続ける。

僕はこの状態を「美的な」という風感じていたが、むしろそうではなくて、ある状態への過渡的なものであり、名づけようのない不完全なものだ。僕は、ある完成した、自分の最高の場所で、「物語」を書こうと思っていたが、それは実際には不可能であるばかりか、むしろ「物語」によって、それを書くことによって——その時の *le meilleur* (最良—引用者註) をもって——しか、完成へと近づく道がないのに、徐々に、気づきはじめた。

自分のすべてを多角的に、文字通りあますところなく、見出してゆくことが、すくなくとも、今の僕になしうることかもしれない。すなわち、出来上がったものへ、自分と切りはなした主題を当てはめるのではなく、自分の問題を、純粹なものへ、自分の側から、高めてゆく。その最高の形式が「物語」ないし「詩」であるということなのだ。(同)

「自分と切りはなした主題」ではない、という点に注目したい。今や「主観」と言うことを明確

に意識し、思索の対象として照射することになったのだ。

このあと「実践の世界、現実、物質の世界は、はてしなく拡がる非人間的な世界」として、これに関する考えが展開される。つまり、現実世界と自らの関わりをとらえなおす。われわれが生きている世界は「偶然的」で「一回的」である。日々の生活の時間は「慣習的」に流れてゆく。およそわれわれ人間の手の及ばぬ物質世界に対して傍観せざるを得ないのか。われわれの生を単にこの物質の世界の「もの」の一つとしてとらえる限り、先にも触れたように「閉ざされた世界」に閉じこめられるにすぎない。より開かれた場を求める人間の精神はこの「閉ざされた世界」の「もの」との交換があって開かれるのだ。

空間には、刻々に変化がおこる。人々は考え、判断し、推量するが、この空間と同時に閉ざされた現実の体系内にとどまる。それは唯一のものであり、かけがえのない重量をもっているが、沈黙している。その中に閉ざされ、途方にくれている。……(略)……現実の沈黙した物——人間も含めて——は、待っている。僕らの中から救い出すのを待っている。このような平面の中での代用的運動としての思考ではなく、それと垂直の関係を保ち、つねにその扉を開こうとしているのが、詩的な魂なのだ。(同)

「救い出す」とはどんなことか。「もの」に意味づけるとしてよいだろう。まさしく否定し続けていた恣意的ということになる。ところが主観の最たるもの「私的な魂」に視線を向けた。そして現実世界の象徴である「もの」に対する思いを展開する。

「物」と親しみうるのは、「物」をその閉ざれた状態から救いだすときだけなのだ。すくなくとも、僕らのおかれた精神的状況の中では、そのようにしてしか「物」と親しむことができない。その時はじめて「物」は、完結した球形の中の無限運動——目的と手段の無限の系列——から、ときはなされ、目ざめ、その本質をかがやかす。「詩」がその根源への感動を直接に言語で形象するとすれば「物語」はそのような一まとまりの「話」という世界に導き入れて、その中で、すべての「物」の目を覚まさせるのだ。「物語」もこの意味では「詩」とは本来的に別個のものではない。(同)

そして辻邦生は、物語とは「ある沈黙した存在」の「扉を開く」とする。だが説明ではない。その存在の説明は「現実の置きかえ作業の一つであって、絶対的な、唯一的関係を『物』との間に結ぶことはできない」とし、「同一次元に立つことから、その『物』の本質の次元へ転化する方法の一つとして『話』は存在する(5月13日)」とした。

ここで辻邦生は「灰皿」を例にとる。この「灰皿」を閉ざされた世界に置く限り、単に灰皿であって永遠の存在でしかない。それをどんなに言葉をつくして語っても沈黙し、閉ざされている。

それ(灰皿)が開かれ、何物かを語るためには、僕らが、灰皿と結んでいた従来の関係から脱し、全く別個の、いわば絶対的な立場に立つ必要がある。僕らは、眼の前に灰皿を見ているが、灰を落すためのものでも、装飾でもない、その「物」の存在自体があらわれて来る。そのような根源的な眼にとっては、「灰皿」は醜悪であり、グロテスクであろう。あるいは、僕らの知らぬ新しい途方もない姿をしているかも知れない。僕らは、突如そのような視点を獲得することもあるだろう。しかし、それには「物」との、純粋な関係を保つべくつとめるながい訓練がいる。(5月13日)

そして「話」はこの方向への「努力」としてであると、辻邦生は考える。

それ(「話」)が、本質を語りかけるときの姿、——真にそういうものであるという究極の姿が、開いたときそういうものであることが、何より必要なのだ。

(同)

このような考えに至ったのちに、一つの視点として幼児期のことを思慮の対象とする。

その深い神秘的、豊かさ。僕らの本質を決定している幼時の幽暗な世界は、僕らが実際に感じている以上に、意味深いものだ。僕らが、僕らのもっている感覚に達するまでの、形成の過程、すべてが驚きである不思議な世界。充実し、豊かで、みずみずしい世界。外からみれば、何の知識も力もない幼児の世界が、どの

ような世界にもまして豊かで神秘的なのは、なぜか。その秘密はどこから生れてくるのか。外界の貧しさなど、ここでは何の意味もない。小石すら宝石にかえる魔術の世界に入れば、現実という確からしきなど、とるにも足りないものなのだ。有効性、客観的認識というようなものは、この魔術の世界では、全く用をなさない。それはただ変形する現実の無意味さ、索莫たる拡がりの中での、技術であり、そこにとどまっている。(5月15日)

とすると客観的認識は誰にも理解しうる、恣意性のない捉え方であるから、幼きものたちにとってははさして重要なものではないことになる。彼らは客観的認識などはしない。関係ないものに関心を示さず、従ってそれは主観的な認識の対象にもならない。つまり幼きものにとって認識の対象は常に自らの関心のあるものを主観の世界に取り込むそれだ。そして「知る」ということは、知的に所有することであり、分別のわかる人間の捉え方であり、幼児たちには無縁だ。

「もの」たちとの親和とは「もの」を主観的に意味づけるとした。従って客観的認識とは無縁ということになる。「話」もしくは「物語」はこの意味づけの一側面であるとすれば、客観的認識は重要ではないということになる。

「もの」と親しむとは、たとえば幼きものが人形と会話していることを想定してよいかもしれない。これと同じように人間は「もの」に意味づけ、会話することで、辻邦生のいう「開かれる」ということになる。

現実の沈黙した「物」を無数に重ねるよりも、一行の詩が、いかに開かれ豊かな世界を語るか。またそのように澄んだ眼には、限られた片隅の世界がいかに豊かな内容をくりひろげるか。僕には、僅かながら、それが現われてくるのが、わかる。「物」たちの話をきく魔法の聴力が、与えられようとしている。心をときめかせ、そこに陶醉するこの甘美な世界。僕は、《予感》のなかにいる。(同)

(以下次号)

(1997. 3. 31 受理)